

宇野学区の歴史的概説

1. 宇野学区は水の底!? (縄文時代～中世末期)

岡山平野の南部およそ 3 分の 2 が江戸時代以降の干拓地であることは、よく知られています。中区で言えば、操山の南裾あたりがそれまでの海岸線だったと思われます。操山と龍ノ口山との間に挟まれた旭東平野は、旭川河口部に土砂が堆積してできた湿地帯でした。そのような時代の旭川は、龍ノ口山と明見山（三野公園の山）の間を抜けると、八つ手のように広がって流れていました。メインとなる川筋は時代によって変わっていったようです。

宇野学区のエリアは、縄文時代にはいまだ海だったと考えられています。操山が島のようにぽっかりと海に浮かんでいたことでしょう。その後、旭東平野にも土砂の堆積が進み、弥生時代になると、微高地に人が住んで集落ができ、低い湿地帯には水田が作られるようになりました。昭和後期から平成にかけて行われた百間川整備の際には、河川敷（原尾島、沢田など）で、主に弥生時代から古墳時代の集落や水田の遺跡が発掘されています。

古墳時代、飛鳥・奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代、と時代が進むにつれて、土地を支配する層は、古代豪族、ヤマト政権、貴族、武士と変わっていきましたが、水田の広がる農村地帯という当地域の状況にはさほど変わりはありません。

原尾島の小島神社には、この地がかつては川中の小島だったという言い伝えがあり、旭川がこの付近を流れていた時代の様子を彷彿とさせます。また、いま宇野小学校がある辺りには「尾島池」と呼ばれる細長い湿地帯があり、旭川の旧河道であったと江戸時代後期の地誌に記されています。宇野学区をはじめ旭東平野には「ふけ」「深田」と呼ばれる泥深い田が数多くあったという記録からも、幾筋もの旧河道がこの地域一帯を通過していたことが推定されます。

2. 岡山版“天下分け目の合戦”の舞台 (戦国時代)

徳川の天下を決定づけた「関ヶ原の合戦」は有名ですが、そのローカル版ともいべき重要な合戦が、戦国時代の岡山地方にもありました。備前の戦国大名・宇喜多氏と備中の戦国大名・三村氏が岡山の覇権を争った「明禅寺合戦」(1567年)です。合戦の舞台は、宇野学区を含む旭東平野。

県立岡山盲学校と沢田集落との間にある操山の尾根上に、当時、明禅寺城という砦がありました。西への進出をもくろむ宇喜多直家が築いた前線基地でしたが、敵対する三村氏に奪い取られ、それを奪還する形で始まったのがこの合戦です。宇喜多軍は明禅寺城襲撃の企てをわざと喧伝する陽動作戦で、三村軍を備前に誘い出します。

前年に先代当主・三村家親を宇喜多に暗殺されていた三村一族は、宇喜多憎しの勢いで二万の大軍を揃え、三隊に分かれて旭川東岸の旭東平野を目指します。一方、五千ほどの軍勢だったという宇喜多軍は、素早く動いてまたたく間に明禅寺城を奪還し、その勢いのまま三村軍へ。

何も知らない三村軍は、まず先遣隊が南から現在の県立岡山朝日高校あたりに到達しましたが、操山から宇喜多軍の急襲を受け、総崩れとなります。第二隊は原尾島に差し掛かったところで明禅寺城の落城と先遣隊の敗走に気がきますが、どう行動すべきか軍議に手間取るうちに宇喜多軍の攻撃を受け、竹田・中島・八幡あたりを迷走した挙句、撤退。総大将が率いる三村軍本隊は、祇園付近で旭川を渡り、龍ノ口山の南裾野を沼城(当時の宇喜多氏居城)めざし西へ進軍していましたが、四御神付近で味方の敗退

に気付きます。急ぎょ操山方面へ方向転換したものの、こちらも素早い宇喜多軍の攻撃を受け、また旭東平野の慣れない湿地帯で足を取られたこともあってすっかり負けモードとなり、総崩れで備中へと敗走しました。

宇野学区を含む旭東平野のあちこちには、三村軍の戦死者が数多く残されましたが、宇喜多氏は地元民に命じて、それらの遺体をまとめて葬らせたということです。「首塚」と呼ばれるそんな塚が、かつては各所にあり、供養の行事も長らく続いていたそうですが、行事は絶え現存する首塚もわずかです。

この合戦に勝利した宇喜多直家は、岡山城も手に入れてここに拠点を移しました（1573年）。これをきっかけに、それまで寒村だった岡山の地が備前の中心地となっていくのです。

3. 旭川と街道の大改造（安土桃山時代）

宇喜多直家の次の代・秀家の時に、岡山城は本格的な近代城郭に建て替えられます（1590～1597年）。その際、城の護り（水堀の設置）と水運（建設資材の運搬）の目的で、旭川が現在のような形に付け替えられました。それまでの旭川は、宇野学区を縦断するように操山寄りを流れるのがメイン流路でしたが、その流れを竹田の先端でせき止め、現在のような岡山城の脇を流れるルートに固定化したのです。

岡山城の建設と並行して、城下町の建設も進められました。配下の武士たちを城のまわりに住まわせるだけでなく、当時をはるかに発達した商業地だった福岡（瀬戸内市長船町）や西大寺などから商人を呼び寄せ、また建設を担う大工などの職人も城下に集めました。

城下町のさらなる発展をもくろんで、それまでは龍ノ口山や半田山寄りを通っていた山陽道を、ぐっと南に迂回させて城下町に引き入れたのもこの時です。このルート変更により、山陽道は宇野学区の真ん中を突っ切ることになりました。現在、国道250号線のやや西を、原尾島～国富～森下町～古京町と貫いて京橋に至る裏道が、この時できた旧山陽道です。

なお、旭川の位置が変わったことで、現在の宇野学区という地理的なまとまりが生まれたと言えます。それまでは、浜、西川原、東川原、竹田は旭川の西岸、原尾島、穨、中島、藤原などは東岸でした。そのため前者は「御野郡」、後者は「上道郡」と、行政区画も別々でした。現在でも、神社の氏子という面では昔の区分が生きています（浜は岡山神社の氏子、西川原は伊勢神社の氏子、竹田の一部は御崎宮の氏子というように、いずれも西岸の神社に属する）。この後、江戸時代を通じてこの古い行政区画は修正されないままだったため、宇野地区が行政上も一つにまとまるのは明治時代を待たなければなりません、その起因となったのがこの時代だったのです。

4. 時代を代表する治水・利水事業の舞台に（江戸時代）

江戸時代の備前岡山を治めたのは藩主池田家ですが、池田光政（藩主期間1632～1672年）・綱政（同1672～1714年）の時代には、津田永忠という土木に秀でた優秀な藩士に恵まれたこともあり、時代を代表するような土木事業・建設事業が次々に営まれました。閑谷学校の建設や後楽園の造営などが有名ですが、新田開発（干拓事業）や利水・治水の土木事業も目覚ましいものでした。

その最たるものが「百間川」の造成です。旭川を岡山城下直近に引き入れたことは、防衛・水運の面で大きなメリットでしたが、旭川がいったん増水した際は城下町が水害の直撃を受けるという見過ごせないデメリットが生じました。藩主光政は儒学者・熊沢蕃山に対策案を命じ、津田永忠はその構想をもとに現実的な修正を加えて、放水路・百間川を造り上げました（着工1669年、完成1686年）。

旭川との分岐点に「荒手」と呼ばれる越流堤が設けられ、旭川が増水した時にだけ水が百間川に流入するという仕組みでした。平時の百間川は水田になっており、地元民が耕作していましたが、百間川に水が押し寄せれば当然この作物はダメになってしまう上、当時は百間川の堤防も不十分なものだったため、周辺地にまで水が溢れて大きな被害となりました。それでも、城下町が大水の被害を免れるメリットのほうはるかに大きかったので、藩は百間川周辺の農民に対し、年貢を軽減したり、助成米を配給するなどの配慮で対応したと伝えられています。

津田永忠は百間川の役割を治水だけでなく、利水にも向けました。旭川・吉井川間の下流部に新たに開いた干拓地、倉田新田や沖新田の灌漑にも役立てようと企画したのです。百間川の河口部に大規模な樋門と遊水地を設け、百間川の排水を溜めて干拓地の農業用水を確保しました。しかし、農業用水はこれだけでは不十分だったため、多くの用水路が整備されました。祇園北部（龍ノ口山の西）から旭川の水を取り入れ、宇野学区の真ん中を縦断して延々南へ延びる幹線用水路「祇園用水」もその一つです。また、祇園で取り入れた水は「後楽園用水」にも分水され、宇野学区の西部を潤しながら後楽園へと水を供給していました。いずれも、津田永忠が手掛けた沖新田開発や後楽園造営に関連したインフラなので、この時期に永忠の指揮のもと整備されたと考えられています。

なお、百間川も、祇園用水などの用水路も、また岡山城直下を洗う旭川の新しい流路も、何もない土地を一から開削したわけではなく、元々あった旭川の旧河道や細流を利用して造られました。本来この地域が旭川の沖積平野・氾濫原であったことを思い出させる水の風景です。

5. 宇野村の誕生（明治時代）

明治時代に入ってこの地域が経験した大きな変化は、やはり「宇野村」の誕生でしょう。この「宇野村」が現在の「宇野学区」の元になります。それまでは、原尾島・楳・中島・八幡は「上道郡宇治郷」、浜・西川原・東川原・竹田は「御野郡出石郷および弘西郷」に属するという、旭川の古い流路に即した区分のままでしたが、1875年（明治8年）の郡界変更時に、実際の地理状況を考慮して後者の4か村は上道郡に編入され、さらに1889年（明治22年）の町村制実施時には、その4か村と前者4か村を合併させて「宇野村」としました。宇野という地名は、宇治郷の「宇」と三野郡の「野」をつなげて創られたものです。

この宇野村という行政単位は、1931年（昭和6年）に宇野村が岡山市に合併されるまで42年間続きました。現在の宇野学区はこの宇野村に基づいていますが、1977年（昭和52年）、人口増大を理由に宇野学区と高島学区のそれぞれ一部が分離して「旭竜学区」が新設されたため、宇野学区は当初の範囲より少し縮小しています（中島の大半、楳の一部、八幡が旭竜学区へ移籍）。

6. 鉄道の走る郊外の地から市街地へ（明治時代～）

日本で初めて鉄道が走ったのは、1872年（明治5年）の新橋・横浜間であることは知られていますが、その後、明治政府の財政難もあって鉄道の敷設は思うようには進みませんでした。それに代わって、民間資本による鉄道建設が盛んになり、明治20年代の私設鉄道ブームのさ中、神戸から西へと順次路線を延ばしていた私鉄山陽鉄道は、1891年（明治24年）に三石～岡山間を開通させました。この山陽鉄道は、1906年（明治39年）には鉄道国有法により国有化され、国鉄時代を経て現在JR山陽本線となっています。

明治の末になると、宇野学区にもう一つ鉄道が敷かれました。愛称「けえべん」こと西大寺鉄道です。

当時、西大寺は山陽本線のルートから外れて交通の便が悪かったことから、西大寺と岡山中心部とを結ぶ鉄道が計画され、民間資本による軽便鉄道として1911年（明治44年）に西大寺～長岡（のちに財田と改称）が開通、翌年、長岡～森下が開通しました。軽便鉄道とは、通常の国鉄路線などより狭い軌道を使う簡易な鉄道のこと、安価に建設できるため、特に地方では当時さかんに採用されていた方式です。長岡駅は現在の東岡山駅のことで、国鉄との乗換駅でした。1915年（大正4年）には、森下駅から後楽園駅（現在の夢二郷土美術館）までが延長され、岡山中心部へのアクセスがより向上しました。

宇野学区内には、後楽園駅のほか、原尾島駅が置かれ（後に位置をずらして岡山競馬場前駅となる）、地域住民にも親しまれましたが、国鉄の赤穂線が全線開通した1962年（昭和37年）に役目を終えて、西大寺鉄道は廃止となりました。

1972年（昭和47年）には、山陽新幹線の新大阪～岡山間が開通し、新幹線の高架が宇野学区を横切る風景が出現しました。また、住宅地化による人口増加に伴い、2008年（平成20年）には山陽本線の高島～岡山間に新駅「西川原」が開業しました。

江戸時代には山陽道が通り抜ける農村地帯だった当地区は、いまや岡山中心街に隣接した市街地として、鉄道や幹線道路が走る便利なエリアとなっています。